

アートの たねと 半農半芸

半農半芸アーティスト

甲斐 隆児
Ryuji Kai



ひらけごま（部分）

アートのたねと半農半芸

発行 2020年11月17日

発行者 甲斐 隆児

〒883-0022 宮崎県日向市平岩1590-1

電話 090-7150-2424

メール iwayaki30@gmail.com

© 甲斐 隆児

みなさん、こんにちは。

半農半芸アーティストの甲斐隆児といいます。

宮崎県で生まれ育つて、絵画や立体作品をつくつてきました。今は大学院の研究生として、緑地保全や里地・里山のこと学んでいます。

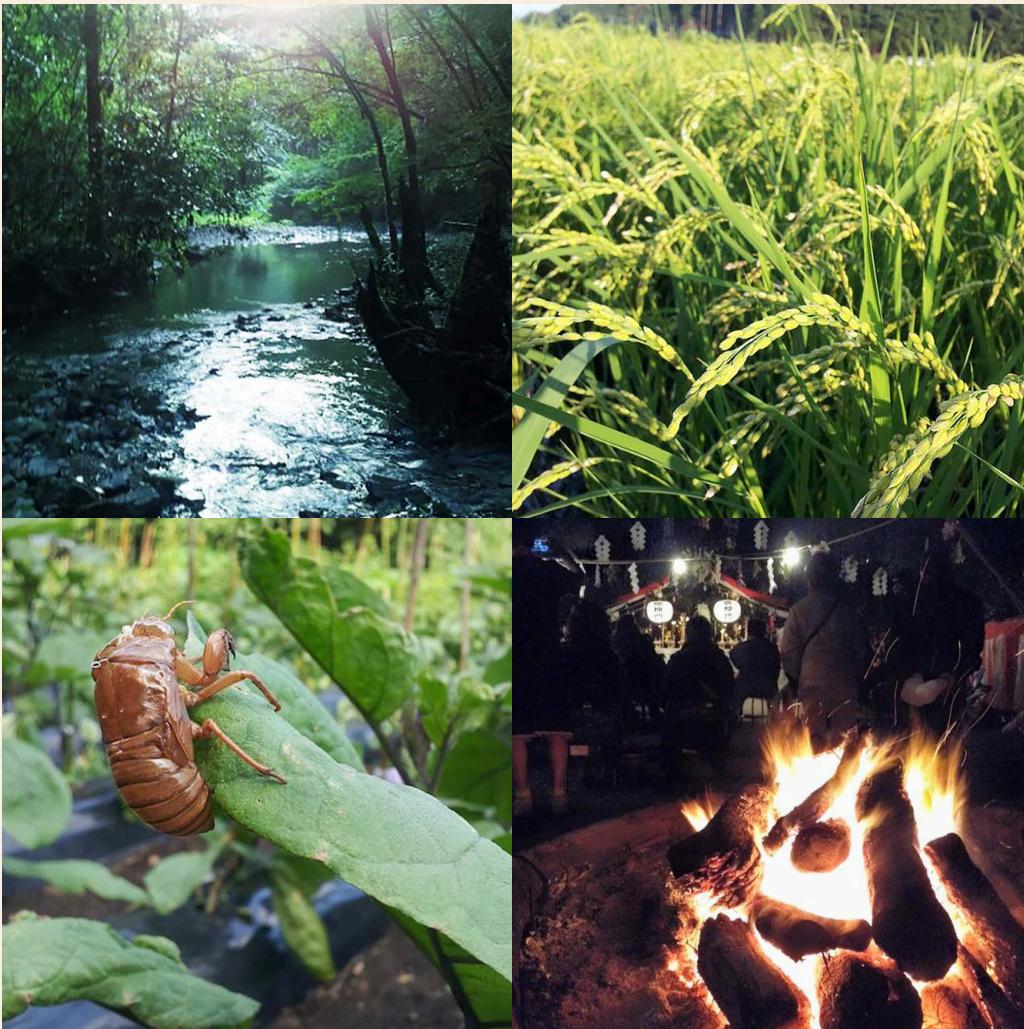
“半農半芸”とは何か？簡単に言えば、相関するアートと農業や環境や地域のことだと、ぼくは思います。

農家が種を植え育て作物を収穫するように、ぼくは、“アートのたね”を育てて、作品につなげています。これが半農半芸アーティストとしてのぼくの“アートのつくり方”です。

アートにもつくり方があるんです。そして、アートのたねも。

この本ではそれをお伝えします。





宮崎には、たくさんのアートのたねがあると思います。

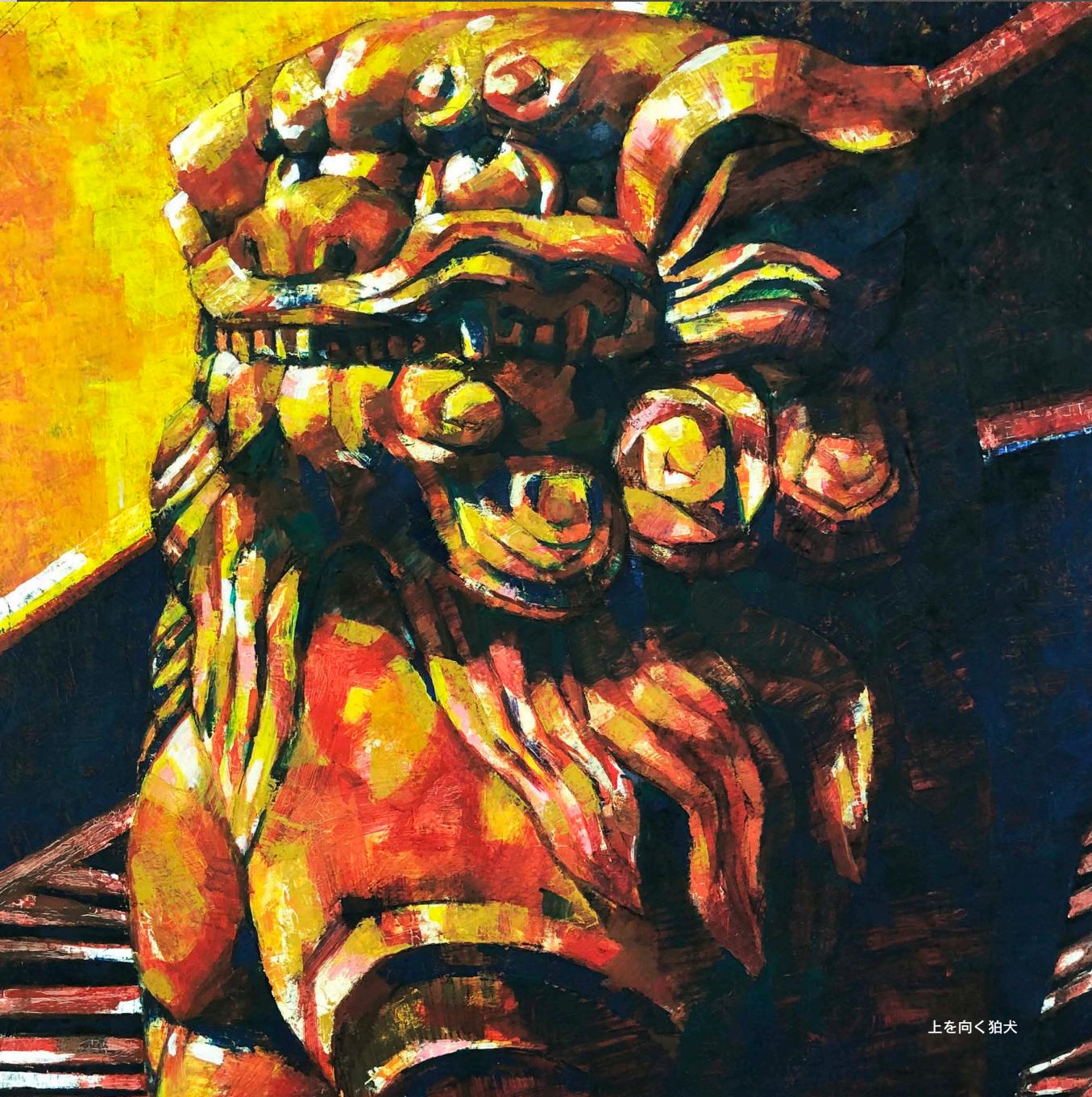
「地方や地域の価値や魅力のヒントが、アートのたねと半農半芸にあるのでは？」

「半農半芸アーティストとして、何を伝えたいか？」

そんなことを考えながら作品をつくり、時にはその問い合わせる表現や発信をしています。

もちろん、実際に作品を見てほしいのですが、この本を通じてもメッセージを伝えたいです。

絵と対話するようにはいきませんが、少しでもぼくの作品、その内容を味わってもらえたたらと思っています。



上を向く狛犬

これまでの制作

まずは、ぼくの作品制作のことについて、聞いてください。

ぼくは大学で油絵を専攻し、卒業後は主に狛犬を描いていました。狛犬を選んだのは、自分のタッチと重たく硬い狛犬が合う気がしたから。本当に描きたいモチーフや題材はそのうち見つけようと思っていました。

ばあちゃんの赤飯のおにぎり

大きな転機は何度かありました。そのひとつが、初めての個展の時です。

会期中のある日、祖母がお重に詰めた手作りの赤飯のおにぎりを持ってきました。それを見て「この会場で一番のアーティストは、ばあちゃんや。ばあちゃんには敵わない。」と思ったのです。祖母にもそれを伝えましたが、また変なこと言いよるわというような顔で笑っていました。赤飯のおにぎりを見た瞬間にぼくにはわかります。実家で収穫したもち米と、うちの畑で祖母が育てた小豆。孫の晴れの舞台の祝いのために、前の晩からもち米と小豆を水につけ、朝早くから起きて蒸し器で赤飯を蒸す。できあがった赤飯を握ってお重に詰める。台所に立つて赤飯を作る祖母が見えます。それは、お祝いの度に赤飯を蒸す姿、小豆を育てる様子、小豆を干して一升瓶に入れ保存するところを見てきたからです。祖母はたくさんの中を味方についているように感じました。「アトリエで一人作品をつくる自分は敵わない。ばあちゃんはアーティストなんじゃないか。」と思いました。以来、アートとは、アーティストとは何なのかを考え探ることに意識が向くようになりました。たぶん、このことをきっかけに、ぼくはアートのたねに反応するようになつたんだと思います。



「うずまき」から「たね」へ

初めての個展の頃はモチーフの転換を試していた時期でした。

作品『上を向く狛犬』のたてがみのうずまきが気に入り、さらに描き進めようとしたが全くうまくいきませんでした。カタチある狛犬を描く『具象画』から、カタチのない自分のイメージを絵にする『心象画』への作風の変更は想像以上に苦戦しました。そこで、自分にワークショップを仕掛けることにしました。

ワークショップ —2文字、3文字らくがき—

一旦うずまきから離れる。



ひらがな2文字、3文字の言葉からイメージする絵を描き、気になつたものを残す。

はね なみたね ほし おと せかい ひかり といよ… etc



イメージ絵描きに慣れてきたら、文字数の制限をはずし、さらに言葉を探す。

かさぶた いんとよう あらまほし じゅせい
あつちとこりのや… etc



気になつた言葉とうずまきを合わせ、絵にする。組み合わせ方は自由。複数でもOK。

このワークショップで、「たね」、「はね」、「なみ」の油絵を描き、作品『ひらけごま』と『ほし』につながりました。立体作品の『纏』（てん）と『たね』もあります。また、うずまきのことを「たね」と呼ぶようになり、ぼくの作品の基本構成素材であり、新しいモチーフとなりました。これが2つ目の転機です。





ひらけごま（部分）

改めてつながった、宮崎

「たね」から生まれた『ひらけごま』と『ほし』を見ていると、自分が作品を通して宮崎とつながっていることを感じました。強い日差しを照り返す宮崎の景色には、多彩な色味を感じます。宮崎の色味とぼくの作品は似てる。つながってる気がする。思わぬ発見にうれしくなりましたが、制作はまだまだ思うようないきませんでした。まだ何かが足りませんでした。



ほし

牛飼い、畑の人になる

新しいモチーフのたねを手に入れたあと、児童養護施設で職業指導員として約2年間勤務しました。その施設では子どもたちと一緒に牛や野菜を育てていて、ぼくは牛や田畠、作業の管理を担当しました。

そこで勤務経験が3つ目の転機です。

牛舎の敷草換えや放牧。牛の分娩。子牛のセリ。

野菜の植付け、収穫。米の苗床づくり、田植え、稲刈り。

牛エサ用の川べりの草刈り。園内の草木の手入れ。

等々、いろんなことをさせてもらいました。

その体験から得た感触、感覚はうまく言い表せられない、生の刺激・感覚です。

印象に残る体験があります。慣れない刈払機の練習のため川べりで草刈りしていた時、ふと作業の手を止めて山を見ると、夕日が沈んでいました。すると、体が自然に動き、両手を合わせてお辞儀をしたのです。その動きに自分で驚き、自然への畏敬ってこういうことなのかと体感しました。たぶん、日がのぼるおかげで作業ができるお礼を伝えたかったんでしょう。頭で考えるよりも、体が動く。表現する。初めての体験だったかもしれません。ぼくに足りなかつたものは、生の刺激・感覚。その体感と蓄積も、"アートのたね"だと思います。





ひらけごま（制作中）

今は、『ひらけごま』2作目を制作中です。その作品は描いている途中で「これも、ひらけごまだ」と気付きました。
たねは立体作品を制作中です。これはワークショップを開いて参加者の方たちと一緒に作ろうと思っています。ぼく一人ではかなり時間がかかりそうなので、たくさん的人に協力してもらいたいです。

ぼくは牛飼いのあと、児童指導員として勤務しました。児童福祉により深く関わり、そこでの学びや経験で、アート観がより一層変化・変容・変態していきました。メタモルフォーゼの時期だったと思います。今は、これから宮崎での活動、その展開を探り直しています。

アートのたねには様々なものがあり、いろんなところにあります
が、都会にくらべて、地方・地域にはアートに触れる場が少なく、
「アートって何ね？ そんなの知らんわ」と言われることがあります。
そんなところにも、しつかりアートのたねはあります。農、
地域、環境の知識やノウハウ。そこに関わり体感する生の刺激や
感覚の蓄積。それらがアートのたね、もしくは「アートを育てる
土壤」だと思います。宮崎のような地方や地域には、そのたねや
土壤がふんだんにあります。そんな地方や地域、宮崎をぼくは
残していきたいです。

モチーフの模索、自分に仕掛けたワークショップ等の試行錯誤
もありつつ、地域の生の刺激や感覚、アートのたねや土壤に強く
影響を受け、ぼくは作品制作しています。これがぼくのアートの
つくり方です。だから、自分は半農半芸アーティストだと思うん
です。

絵がすき、ものづくりが得意というだけで、作品をどんどん
つくれるわけではありません。表現したいものをうまく出せ
ないことばかりです。自分なりの創意工夫とアートのたねと土壤
が、作品制作には大事だと思います。

アートのたね、アートのつくり方、半農半芸の話、いかがで
しょうか。よかつたら、参考にしてください。

最後に

今更ですが、そもそも半農半芸という言葉に、ぼくはちょっとと
違和感を感じます。言葉通りだと、農とアートのハーフ＆ハーフ、
半分半分ですよね。

ぼくのイメージは、二重丸。アートを孕んだ農なんです。何かに
孕まれたアート性。ぼくはそれを「内包アート」と呼んでいます。
この内包アートの二重構造。まるで、たねみたいですね。

子育ちや子育て。福祉や教育。まちづくりや地域課題へのアプ
ローチ。等々農に限らず、いろんなものがアート性を孕んで
いるように、ぼくには感じます。

内包アートの話は、次回の本で聞いてもらうかもしれません。
最後まで読んでいただいて、どうもありがとうございました。



甲斐 隆児 かいりゅうじ
半農半芸アーティスト

1981年生まれ。宮崎県日向市出身。現在は、
九州大学大学院芸術工学府緑地保全研究室に
研究生として所属。里地・里山や緑地の保全
活動等に関わりながら、地方や地域のアート性、
内包アートの表現や発信について模索中。